

酒井敦美さん 光の切り絵作家



「自由に絵を描いていたい」と
突き進み二十数年
唯一無二のアートに
全国からのオファーが続く

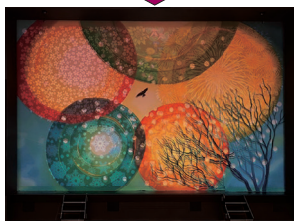
なでしこか

Power of Nadeshiko

「光の切り絵」とは切り絵を光の当て方を変えて表現する酒井さん（長久手市在住）オリジナルの手法。作品は舞台芸術として感動を与え、屋外の風景や街角に映し出す。作品は日本各地で常設されている。昨年はメニコンが新設した「メニコンシアター Aoi」の緞帳デザイン、愛知県主催の「愛・地球博 20 祭」のキービジュアルを手掛け、活躍は広がり続けている。

酒井作品は、日本各所に常設展があり、「旅する光の切り絵展」も毎年、各所で開催され、マスコミからの取材も多い。今年一年だけ見ても、「愛・地球博 20 祭」のキービジュアルを作成、これがイベントポスターとなっている。昨年開館した「メニコンシアター Aoi」の緞帳デザインも担当、そのほか地元イベントへの出品などを続けている。特筆すべきは、本人からの発信を受けてでなく、「光の切り絵」に心打たれた人々が続々とオファーしてくることだ。

酒井さんの作品の展示方法は 2 種類。絵画のよう



「メニコンシアター Aoi」の緞帳（幅 10.6m、高さ 7m）は『一画二驚』のイメージに合わせて、音楽と共に変化する絵柄の原画・デザインを手がけた

ように額縁に入った額縁作品を美術館などで展示するものと、「光の切り絵」作品を、風景や街並みをキャンパスにした空間に映し出す「幻灯空間」だ。

酒井さんの額縁作品は、順光と逆光、光の当て方で違う表情を見せる。一つの作品で二度驚くことから童話作家の鬼頭隆さんが「一画二驚」と名付けた。同様の手法は「メニコンシアター Aoi」の緞帳にも使われ、光を当てながら流れる音楽とともに変化（写真左下）、観客は開演前からアートを楽しめ、最後に緞帳の真ん中の黒い鳥が

飛び立つと会場から感動の声が上がる。同作品もメニコンの田中会長からの直接のオファーで決まった。「愛・地球博 20 祭」も作品を知る県職員らの尽力があってオファーとなった。



愛・地球博 20 祭のポスター
キービジュアルにもなり
関連ワークショップも開催中

作品のもうひとつの特徴である、「幻灯空間」は、作品を OHP（投影機）やプロジェクターを使って、街並みや酒蔵、砂浜などを、大きなキャンパスに見立てて映し出すものだ。「光の切り絵」作品を透明フィルムに転写、または作品そのものを OHP のステージ上に置き、大きく映し出す。見た人は異世界に飛び込んだ感覚になり、子どもたちは色のついた世界で夢中で遊ぶ…「幻灯空間は、私の作品だけでなく、作品と遊ぶ姿があって成り立つものだと考えています」と酒井さん。

酒井作品は新日本海新聞社に認められ、企画制作を行う名古屋の「ハンズプロ」と、酒井さんの三者がチームを組み作品の全国巡回展も開



光の切り絵空間の中に溶け込む子供たち